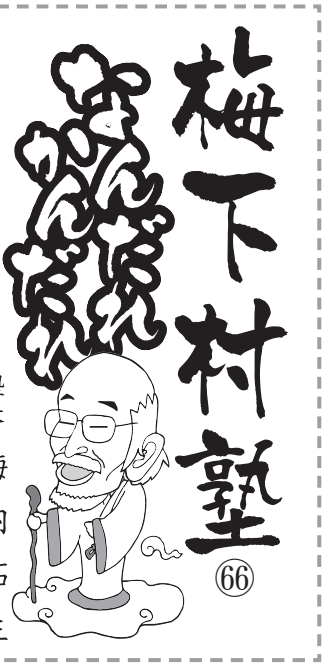
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



東日本大震災から学ぶもの(2)

（核実験）

北朝鮮の3回目の地下核実験の報道は連日、日本政府の反応とマスコミのコメントでいっぱいである。核爆弾は既に米国、ロシア、イギリス、フランス、中国、などの国連安保理事国は所有しており、インド、パキスタン、イスラエルも保有している。国連には核拡散防止条約があるが、北朝鮮の核実験を防止できなかった。イランも核実験の準備を始めていると報道されている。

核拡散防止条約に対して、非核保有国は色々な矛盾を感じている。何故、一部の国だけが核保有をして、他の国は保有を禁じられているのか？これは、常任理事国など大国のエゴのためではないかと？確かに核爆弾の管理には十分な注意と慎重さが必要である。しかし、これ以上に核爆弾の保有は、大きな軍事力と政治力につながる。この問題解決は、従来のやり方では解決が益々難しくなっていくと考えられる。

東日本大震災の時の、被災地の人々の自ずからの忍耐と抑制による秩序ある対応に、世界は驚嘆している。東日本大震災で示した、この東北の人々の忍耐力と抑制こそ、核爆弾、環境、政治、経済、人口問題など、21世紀が抱えている深刻な問題の対応に、静かな中に力のあるものとして世界から注目を浴びることが考えられる。

（核保有税）

気仙には貝塚、土器、石器など縄文の遺跡が沢山ある。縄文文化は魚貝類を始め、クジラのような大型のものの狩猟も行われていたことが知られている。貝塚遺跡の分析によると、クジラ一匹まるまるの骨は見つかっていないとされている。

クジラのような大型動物の狩猟には、集落を越えて、広くいろいろなグループが参加して協力し合っていたと考えられている。縄文文化には帝国は成立しなかったと言われている。

紀元前のアレキサンダー大王のオリエント世界の征服と帝国の建設は地中海の領域からアフリカ北部、そしてインド亜大陸の西部にまでおよんでいる。ユーラシア大陸の東には紀元前の十世紀前から秦王朝を始め数々の大帝国が成立している。これらを支えた帝国主義は現在の国連常任理事国制度を抱えている国連にも見られ、世界政治にも大きな影を及ぼしている。さらに、これら帝国主義は、現在世界に見られる複雑な政治、文化、環境、人口などの深刻な問題の発生と深くつながっている。

遥か遠い昔の縄文時代の文化から、何を学び取れるのか？それは生きるためにお互いに協力しあうことである。（核実験）と（核保有税）とがバランスよくつながれば、核を保有する政治的利益が減少するものと考えられる。帝国に向かわずに、おたがいに協力し合う、この縄文のバランス感覚こそ、21世紀の世界に必要なものである。人類の歴史は戦争の歴史といわれており、租税が戦争と強く結び付いてきたが、核保有税の構築は、まさに、この戦争を抑制することに役立つものと思われる。

（温故知新）

2月10日（日）の第1面の世迷言は国際常識を逸脱して領土拡大主義に走っている中国政府への批判をのべており、中国政府は反省のためにも論語を詠むべきだろうと述べている。

「故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る」、この「温故知新」は論語にある孔子の教えである。2011年5月の「森と水と命の惑星」国際会議にパネリストとして出席した中国山東省出身女性の温秀輝氏は現在住田町の気仙プレカットで働いており、現代中国の教育を受けてきた自分が、日本で改めて気がついたことは中国の古典を勉強することであると述べていた。

彼女は学会で、中国古典から心に響く「ことば」を選んで発表している。気仙には温故知新の宝が埋もれている。